

リレー随想

アルコールなしでお茶とケーキだけの披露宴をします、という手書き案内状を出していた。水上村湯山在住のトルストイ研究家・北御門二郎氏は、前に出られるとすぐ「どんな結婚式なのか、よく分からないので、その場の雰囲気を見て話をしよう」と思っています」とおっしゃった。お名前だけは以前から聞いていたが、私はこの日、初めてお会いする。マイクを両手に持ちながら、話を始められた。

以前、家内が氏の講演を聞いて感動し、手を挙げて質問しようとして、声が詰まって泣き出したぞうだ。それ以来、氏とも家族のようなつきあいをさせてもらっている、家内からは聞いていた。氏もそのことに触れられた後、「物事を何でも受け止められる、柔らかい感受性の持ち主」と紹介して下さり、「落ち着いたら、今度は二人で湯山に遊びにいらっしやい」と話を終えられた。氏の飄々とした語り口は、とても魅力的だった。

家内は、こども文庫の活動やら講演を聞きに行くなど、かなり行動的な人間だが、私はそれ

北御門二郎氏のスピーチ、それと



土地家屋調査士

田口 一法さん

とは逆で、あまり行動的ではないのだろう。わざわざ講演に行こうとしないだけのこと、自分では普通だと思っている。

が、家内と比較すると私の交友関係は…。家内の関係でこの日来てくれた人は二百五十人、私の方は二十人いただろうか。

少し寂しいかなと思ったことだった。私の関係でスピーチをお願いしたのは、熊本に「詩と眞実」という同人雑誌があるが、

当時その編集長だった久保田義夫氏。

家内と私は同じ文芸サークルの仲間だが、私はそれとは別に「詩と眞実」にも加わって、少しばかり小説めいたものを書いていた。久保田氏は私が以前、同誌に発表した作品を取り上げて、それをこと細かく批評し、そしてみんなに紹介して下さった。私は自分の書いたものを、こんなに真剣に読んで下さった方がおられたことがうれしくて話に聞き入っていたが、だんだんと「自分には興味のある話だけれど、他の人には何のことだか分からないだろうな」と、ちょっと気が引けるような感じがしたものだ。家内が私の隣で時計をみていたが、氏の話は十分を超えて、まだ終わる気配がなかった。

「あなたのことを、一生懸命話してくれていたね。あんな無邪気な人はいないよ。素晴らしい先生だね」と家内はいった。七十に近い人をつかまえてと思っただが、無邪気という表現には説得力がある。北御門氏のいう「柔らかい感受性の持ち主」というのは、こういうことなのかかもしれない。「無邪気」というのなら、久保田先生が無邪気になるような、そんな雰囲気がある場所にあったのよ。「詩と眞実」の仲間の一人は、そういつてくれた。

(熊本市花園、47歳)